

# 火星

平成二十六年一月号



七曜抄 (八)

山尾玉藻

昼どきに去にしままなり慈姑掘

夫に遇へさうな茶の花畑ゆく

池浚ひをらむああした雲の下

踏み板をくの字に池の浚はれし

とりけもの踏みし池底雪くるか  
寒鯉を抱へ揚げたる翁ぶり  
針供養竹のさやぎの中を来し  
水のなき橋のたもとの社会鍋  
川すぢに忽然とゐし飾売  
年の火の奢りの灰をかぶりけり

## 推薦のことば

平成二十五年の年間を通じ田中文治氏の獅子座作品より安定したレベルを感じました。

菊脛僧の話にむせにけり  
釣舟を下りる白息をんななり  
方円にしたがふ水の初明り  
連翹に瀬音気負うてみたりけり  
遠吠えに春満月の沈みけり  
日本の土の匂ひぞ燕の子  
日当りて水の色なる心太  
満願の杖を泉に浸しけり  
夜の秋の松を流るる湯もみ唄  
天地のゆらぎに舞ひし桐一葉  
一句目の諧謔、二句目の驚き、三句目の静謐、四句目の感  
覚、五句目の心眼、六句目の存問、七句目の写生眼、八句目  
の感興、九句目の季語感、十句目の自然顕照など、何れにも  
豊かで冷静な詩精神を軸とした安定感を覚えます。

一方、火星作品の場でも、

白萩や古き佛は山を負ひ  
消すほどのことでもないか秋灯  
母立ちしあとの冬日を惜しみけり  
くらがりに水の流るる袋角  
夕食のあとの夕暮瓜の花  
黙禱に子をひきよする終戦日

等の優れた作品を発表されており、弛まぬ努力を窺い知ることが出来ました。

句は為人、作品から豊かで穏やかな人柄が思われます。向後の益々のご精進を願っております。

## 第二回 昴賞

田中文治

平成二十四年度の昴賞を右の通り  
決定致しました。

平成二十六年一月

火星俳句会主宰

山尾玉藻

# 太白星

杉浦典子

月明のぶなの木に耳当ててゐる  
鳥渡るメタセコイアの葉の降つて  
木洩一れ日の長左右衛門谷小鳥来る  
海見ゆる梯子の高さ松手入  
門柱にひと日逆さの枯蟻螂  
露けしや有馬人形筆干され  
鯨とんでとんで水面のふくらめる

浜口高子

千体仏の千の隙間やつづれさせ  
まんだらの裏やちちろの昼の闇  
一の膳二の膳美しき星の降る  
火吹竹のよき艶寝かせ普賢院  
霊山のこだま痩せぬし柿の艶  
烏瓜捨ててきし手の重かりし  
重石とり莖菜の息を聞きにけり

# 火星作品

## 山尾玉藻選

夕づくとくや水際明りの石叩  
橋ひとつへだつ山廬の昼の虫  
拝殿に人のぬくみや小鳥来る  
烏瓜谷の底ひの月あかり  
馬追の月の昼に落ちし音  
猫の手が秋水の雲搔きにけり  
人ごゑのすする明け方の綿畠  
切り花に水吸ふ力野分晴  
秋早庭下駄で父出でしま  
秋風や投網に濡れし草の色  
賜の贄高野吉野は峯つづき  
火恋し高野山は鳥語つつしめる  
蜘蛛の囀に露のかかりし高野口

吹田田中文治  
宝塚山田美恵子  
神戸深澤鱧

結界に 蓆四五枚 松手入  
銀屏の ひかりの 朽ちし 後の 月  
ぎす 鳴くや 夫に 日暮の ハイポール  
種採の 何か 歌つて みる らしく  
すりこぎの 音と のうて きし 夜寒  
柿甘しか の 日ざらし の 少年 期  
三島忌や ゆる びしまま の 金 釦  
秋収め 手提げ に のぞく 高野 槇  
稲架 かけて 二上山 を 近く せり  
吾亦 紅にと どく 太師の み声 かな  
また 別の 風の とどまる 松手 入  
大淀の 岸の さざ波 鴨待 てる  
宿坊に 隠し 部屋 あり 鴫の 声  
秋風 に 吠ゆる 神農 さんの 虎  
突つ 立つる ことに 飽き きたし 曼珠 沙華  
引き 出しに 見知らぬ 鍵や 十三 夜  
ハロウインの 魔女と 出くはす 風邪 心地

宝塚蘭定かず子

山本耀子

大阪藤田素子

# 選のあとに 山尾 玉藻

橋ひとつへだつ山盧の昼の虫 田中 文治

「山盧」とは飯田蛇笏、龍太の住まいした屋敷、橋は前を流れる境川に架かるもの。今、橋を隔てた山盧は昼の虫の声の中で寂とした佇まいを見せ、改めて蛇笏、龍太への畏敬の念を覚える作者。

鴟の贄 高野 吉野は峯つづき 深澤 蟻

高野の清浄とした山気に佇み、嶺続きの吉野山にまで思いを馳せている。ちつぽけな生きる証しである「鴟の贄」を眼前にいよいよ悠久の時空を意識する。先師圭岳いわく「吟行では大景を詠むか或いは足許を詠むか、ひとつに絞るべし」

種取の何か歌つてゐるらしく 蘭定かず子

来年への期待が膨らむ種取りはこころ弾む作業。「何か歌つてゐるらしく」から楽しげな様子が思われて微笑ましい。

猫の手が秋水の雲搔きにけり 山田美恵子

白雲が映える水に猫が不意に手を伸ばした一瞬である。何気ない景ながら水も大気も清澄な秋らしい瞬時を切り取った。

秋収め手提げにのぞく高野楨 山本 耀子

秋彼岸の頃、高野楨がのぞく手提げの女性と出会いちよつと豊かな心持となつたのだらう。季語「秋収」の斡旋が巧みである。

宿坊に隠し部屋あり鴟の声 藤田 素子

奥深い宿坊の小暗い一角に襖を閉ざす小部屋を見つけ、咄嗟に「隠れ部屋」を想像した。「鴟の声」がその疑いを一層深める。

新藁の運び込まれる陶器市 松山 直美  
唐紙の運ばれ市民菊花展 大山 文字

「新藁」や「唐紙」が運び込まれるのを見て両者共に興味津々で身を乗り出す。新藁は陶器を包むのに用い、唐紙はセツトの障子に使われるのだらうか。俳人の好奇心が新藁の香と陶器の音、唐紙の白さと菊の香と言う、えも言われぬ豊饒の世界を創造する。

色鳥の色のさびしくなりにけり 城 孝子

しばらく色鳥に見入っていたが、その内急に寂しさを覚えたのだらう。ともすると不安や孤独を覚える大病後の心理がよく伝わり、こころが痛む。

鬼灯を鳴らし父にも母にも似ず 涼野 海音

鬼灯を鳴らす横顔が寂しげだが、「父にも母にも似ず」の  
思いに深刻さは感じられない。少々拗ねてみたい、そんな日  
なのだ。

はなれ咲く一株に日々玉すだれ 坂口夫佐子

「玉すだれ」は手をかけなくても長く咲き続ける。一叢か  
らぼつんと離れ咲く一株にもそれなりに咲き続けてきた日数  
がある。

カナリアの身を細め鳴く月夜かな 西村 節子

月明を浴びたカナリアがしなやかに身を細め鳴く様子は誠  
に美しい。童謡「歌を忘れたカナリア」を思わせる情緒あふ  
れる一句。

馬の蹴る砂にけぶりし秋桜 石井 耿太

しなやかな美しさを見せていた秋桜が、馬の蹴り上げた砂  
ぼこりで一瞬かすんでしまった、切り取りに奥行きがある。

(以下略)



# 恒星圈

松山直美

身に入むや金網越しに曼陀羅図  
双塔のあはひに張れる弓の月  
空海の山に残れる暑さかな  
秋遍路御廟の裏に礼交し  
聖燈に空ラのソケット鳥渡る

堀 志皋

村上留美子

秋潮に鱻湧きをり芦屋浜  
新蕎麦の有りに精進料理かな  
宿坊の相部屋にをり長き夜  
新藁の匂ひ満ちぬし道の駅  
冷凍の芋茎を持つて帰れとぞ

狂言の土蜘蛛の糸秋澄めり  
狂言の仕種まねみる昼の月  
雛子手の少年笑まふ壬生の秋  
鳥声のけふは際だつ野分雲  
少年のつまみ見せ呉る大蟻螂

松井倫子

山田美恵子

菊の晴母に行き先あまたあり  
しんがりは霧の中なり鈴の音  
小鳥来る上野マリアの墓碑ちさき  
鴉二羽豊年の水浴びてをり  
むらさきの蝶にまとはれ秋惜しむ

柿挽ぐや日輪のきら真つ向に  
柿採りの指図に息の合はぬ竿  
霧を照らし霧に消へたる夜汽車かな  
瞼閉ぢ月へ鎌上ぐ枯蟪蛄  
翅散らしめ絮を舞はしめ秋の風

# 獅子座

山尾玉藻推薦

西村節子

電柱を風とのぼれる葛の花  
増長天の鬚のちぢるる秋の風  
飴色の格子天井きりぎりす  
白露の如き仏舎利拝しけり

藤田素子

宿坊にネスカフエまざる雁渡し  
つなぐ手のときに離るる花野中  
偉人の墓凡人の墓木の实降る  
引越しのピアノ吊り上ぐいわし雲

林 範 昭

うそ寒や粗櫛沈む神の池  
残菊の朝の木鉢ひびきけり  
練堀の内のあかるき松手入  
結界にまるまる太る亥の子餅

涼野海音

干柿の下に校長立つてをり  
刑務所の堀にきちきちぶつかりぬ  
秋の蝶ローズマリーにまぎれけり  
木の洞を覗いて秋を惜しみけり

根本ひろ子

一位の実ふみ高野山の坊泊り  
朝寒の膝に畳める宿のもの  
金剛山の山影せまる花野かな  
御手洗の杓あたらしき秋遍路

前田 忍

引き直す道の白線小鳥来る  
来賓のリボンに來たり秋の蝶  
アンカーは新任教師空澄める  
牛膝つけて電車に馳け込み来

中尾安一

湖に流れありけり散紅葉  
トンネルに耳のつまりし茸飯  
獣の背のごとく揺れぬし薄叢  
己が影と離ればなれに散る紅葉